

## ヨシヤンの映画雑感

ある歴史学者が、『武士の一分』のキムタク演じる武士には二面性があると言っている。一は、大名の食事の毒味をして生活の糧（禄）を得る支配の側に身を置く面。他は、身分を問わず百姓の子供にも剣術を教えたいという被支配の側の発想。両方に足場を置くという。▼まるで山田洋次がみずからの思想と映画資本の間で均衡をとり、いつか自然体になっているのと似る。いや、それが言いたいのではない。どうも現在の近世史研究では、江戸時代は戦争のない平和な時代であり、被支配の側の「農・工・商」が権力奪取をして、「大名・武士」の支配体制転覆を謀る反体制運動はなかったとの説が主流らしい。「農工商」は「士分」に成り上がりたいとは考えたが、支配階級を打倒する、すなわち革命という発想はなかったという。転覆を未然に防ぐために大名は善政をしき農工商の支持を得る努力をした。「名

君」志向である。▼他方、農民は大名が失政をして「国替くにがえ」にでもなつて、その後には悪玉大名がやってきては困る。だから、せつせと年貢を納め、過酷な政治を未然に防ごうとした。つまり支配と被支配は、持ちつ持たれつの互助的關係にあった。百姓一揆は多発したが、年貢軽減が獲得目標であり、打倒大名ではなかった。百姓一揆はせいぜいが「鎌」を持ち、武器とは無縁であった。のらりくらの平和が江戸時代の特色だという。▼いまこの国は七四年目の戦争のない年月が続いている。ほとんどが悪政だと認識しているが、戦争よりは「よりまし」とも見ている。「九条を守る」なら悪政はある程度黙認しようというのは、江戸時代の「平和論」とつながる。▼去年劇場で見た新作でもっともよかったのは『マルクス・エンゲルス』である。いまこそブルジョア支配を打倒すべく「ユニオン、プロレタリアート」と言いきる二人の革命家を映画は支持している。ところが映画の脚本や監督はコミュニニストでも革

命家でもない。中南米ハイチ出身の黒人で、現在はフランス国立映画学校校長のラウル・ペックである。良心的で社会主義的発想をする知識人。▼世界史的に無産者階級が成立しにくくなり、革命は不可能。市民が団結し富の偏在を緩和すべく立ち上がらねばならない。在るか無きかの財産しか持たない九九%の市民層は革命よりも、もっと正当な分け前を要求する民衆運動こそが大事なのだ。それを組織できれば二一世紀は画期的なものになる。できなければ極右的ポピュリズムが横行するだろう。▼悪政と悪徳支配者を打破し、主権者を代表する「名君」を作り出すのは、われらシチズンに課せられた任務である。この国にも民衆に寄り添う大塩平八郎や幸徳秋水、平塚らいてう等、すなわち革命や前衛党の視点だけではなく、実践的リベラルを中核としての世直し勢力の結成が必要なのではないか。映画もそんな視点を持たねばならないのだ。

## 編集後記

■小誌の代表、堀川が亡くなった。昨年代表に復帰したばかりで、突然の死の知らせにスタッフ一同動揺している。7号の編集をほぼ終えていたが、急遽追悼コーナーを設けることとし、再編集作業にとりかかった。例年なら3月25日が発行日だが、10日ほど延びることになる。奥付はまだ代表が堀川のままになっているが、お許し願いたい。

編集部

■昨年ブレイクした『カメラを止めるな!』をテーマに、年初に論客による座談会を予定していたが、スタッフがインフルエンザにかかり、中止せざるを得なくなった。そこで、誌面で賛否両論をぶつけ合う企画に切り替えることにした。ところが、今度は批評文が足らず、またバタバタする。結局DVDをレンタルして、観る機会を逃したと言う長老のF氏を誘いY氏宅へ持ち込み、氏のテレビを使って映写。コメントをお願いした。見終ると体調イマイチのY氏が目の前でスラスラと600字ほどの感想をまとめ上げる。しかも過激な否定論。さすが、慧眼の作家、早い、すごいと感嘆。と：いうことで、今号の特集Ⅱは、他の映画誌には見られない賛否を対峙させた面白い内容になったと、自負しています。ご一読ください。映

画の見方はいろいろあっていい。だから、面白いし尽きない魅力があると思うのです。 編集部

■昨年は自治会活動が加わったのに重なって秋口から現役時代並みの仕事が入った。観た映画の本数も少ない中、不思議な感触を覚えた作品があった。一つは深田晃司監督『海を駆ける』。デーモン・フジオカ主演。少ないセリフとインドネシアの自然とそこの人々を描きながら時空を越えたい監督の試みを感じ今もその感触が残っている。後一本は濱田竜介監督『寝ても覚めても』。東出昌大・唐田えりか主演。観る前はタイトルからして、恋に落ちた切ないところ持ちかと思いきやどうも勝手が違った。女は前の男が突然姿を消して異質の男に出会う。この男二人を東出が自然体で演じている。唐田も新人ながらよく役に入り込んでいる。組立ては演劇的でセリフのふつうさがい。映画の余韻が今も続いているめずらしい作品だった。タイトルは後でなるほどと気づかされた。

中村

■今年の私の運勢は芳しくないようだ。そんな心配をよそに嬉しい知らせがどんどんと舞い込んでいる。極めつけは東スポ映画大賞授賞式において、なんと大賞受賞者の『カメ止め』監督のプレ

ゼンターに指名された事だ。人生の運を全部使い切ってしまったような勢いである。日頃から舞台慣れはしているものの今回はスケールがあまりにも違いすぎる。シネマ游人の誌面を盛り上げることが出来ればと願うばかりだ。ステーションのタキシードを2着持っていて本当に良かった。授賞式のタイムスケジュールが届き、ようやく夢ではないと確信する。「当たって砕ける!」「まな板の鯉」の心境で当日を迎えた。詳細は冒頭のレポート文を一読してほしい。 森

■3月2日の夜、シネマ游人代表の堀川さんがお亡くなりになりました。その日の昼、この第7号の編集会議で、堀川さんの病状をみんなで心配していた矢先のことでした。

2016年11月に、文化会館で行われた『東アジア名作戦争映画上映会』のお手伝いをしたことから、シネマ游人の仲間に入れてもらいました。戦争映画を上映することで、戦争の愚かさ、平和憲法の大切さを人々に伝えるんだということを語っていたことを思い出します。まだまだ教えてもらいたいことがたくさんあったのですが、堀川さんが愛されたシネマ游人を、これからも大切にしていきたいと思えます。

村上